

# 「バーダー・メインホフ 理想の果てに」

☆☆☆☆

2009（平成21）年6月17日鑑賞<東映試写室>

監督・共同脚本：ウリ・エデル  
 製作・脚本：ベルント・アイヒンガー  
 原作・監修顧問：シュテファン・アウスト  
 ウルリケ・メインホフ（女性ジャーナリスト）／マルティナ・ゲデック  
 アンドレアス・バーダー（RAFのリーダー）／モーリッツ・ブライプトロイ  
 グドルン・エンズリン（RAFのリーダー、バーダーの恋人）／ヨハンナ・ヴォカレク  
 ホルスト・マラー（弁護士）／ズイモン・リヒト  
 プリギッテ・モーンハウプト（RAFの新リーダーの女性）／ナディア・ウール  
 ペトラ・シェルム（RAFの新リーダーの女性）／アレクサンドラ・マリア・ララ  
 ホルスト・ヘロルド（ドイツ連邦警察）／ブルーノ・ガンツ  
 2008年・ドイツ、チェコ、フランス合作映画・150分  
 配給ノムービーアイ

## <20年前は？そして40年前は？>

1989年6月4日は北京で世界を揺るがしたあの天安門事件が発生した日。その20周年の今年、日本では新聞、テレビでたくさんの特集が組まれた。しかし、北京では厳戒体制がとられるとともに、報道制限も厳しかったようだ。たとえば、私が毎朝観ているNHKニュースは、普通なら北京で宿泊していてもそのまま観られるのだが、今回ばかりはNHKニュースでも天安門事件のニュースになるとすぐに画面が真っ黒になるという検閲がなされたようだ。これをみると、中国にとっては20年前の天安門事件の「総括」はもとより、それをふり返ることすらタブーだとされていることがよくわかる。

他方、本作が描くのは今から約40年前に生まれたRAF（ドイツ赤軍）の実態。本作のタイトルになっているバーダー・メインホフとは一体ナニ？それは私も知らなかったが、まずメインホフとはジャーナリストからRAFの活動家に転身した女性の名前。そしてバーダーは自称ジャーナリストで、1967年6月に西ベルリンで起きたイランのパーレビ国王のベルリン訪問への抗議デモを契機として一気に拡大していった学生運動のリーダーの名前だ。彼らがRAFを結成したのは1970年5月14日とされているが、それまでメディアはこのバーダーとメインホフをリーダーとするグループをバーダー・メインホフグループと称していたわけだ。

そんな、40年前のRAFの活動の足跡を描く映画がなぜ今、製作、公開？そしてまた、そんな映画がなぜ第81回アカデミー賞外国語映画賞にノミネート？

## <70年前は？>

2009年の今中国では、約70年前に起きた1937年の「南京事件」を描いた、陸川監督の『南京！南京！』とフロリアン・ガレンベルガー監督の『ジョン・ラーベ』がたて続けに公開されている。「南京事件」で旧日本軍が殺害した中国人捕虜や市民の数がホントに30万人にもものぼるのか否かは、日中の歴史観で大きく分かれる争点だが、なぜそんな映画が今たて続けに公開？

2009年5月15日付朝日新聞は「脱『反日』南京虐殺映画」「中国で2作封切り人間模様」に「当局は『推薦映画に』」との見出しでこの2作をさまざまな観点から分析したから、興味ある人は是非これを読んでもらいたい。両作品とも日本での上映の具体的計画はないらしいのが残念だが、70年前には日中戦争があり、こんな血なまぐさい事件が存在したことをあらためて考えてみる必要がある。人間は歴史から学ぶことが多いはずだから、20年前、40年前、そして70年前をふり返り、それをきちんと「総括」することが大切。そしてそれには、映画は非常に便利な手段では？

## <女子学生の闘士エンズリンは、若き日の重信房子？>

本作の主役はウルリケ・メインホフ（マルティナ・ゲデック）とアンドレアス・バーダー（モーリッツ・ブライプトロイ）の2人だが、3番目の主役がバーダーの恋人である女子学生の闘士グドルン・エンズリン（ヨハンナ・ヴォカレク）。彼女は裕福な家庭の娘のようだから、バーダーの思想傾向に一時的に引きずられているだけ？いやいや全然そうではない。父親に対して激しい討論を挑んでいるエンズリンの姿が印象的だったが、ベトナム戦争に抗議するためフランクフルトのデパートに放火するなど、彼女は主張が激しいだけではなく、行動も超過激だ。

日本では現在レバノン・ペイルートで1973年に生まれた重信メイという日本人が活躍しており、私はその姿を2009年2月1日の『たかじんのそこまで言って委員会』で拝見した。彼女は私の少し上の世代である重信房子（1945年生まれ）の娘だが、重信房子とは一体ダレ？いうまでもなく彼女は、連合赤軍の幹部として有名な女性。

メインホフがバーダー、エンズリンと結びつくのは、「ファシスト国家の暴力には暴力で応じるしかない」と語るエンズリンの言葉にメインホフが同調、共鳴したため。そして1970年5月メインホフがエンズリンと協力して武装グループを手引きし、取材目的で面会したバーダーを脱走させたことによってRAFが結成されるに至るわけだ。そう考えると、本作におけるエンズリンは連合赤軍の幹部だった若き日の重信房子？

## <監督、製作、原作トリオの姿勢は？>

2時間30分の大作となった本作には、1967年から1977年までの10年間にわたるRAFの活動の軌跡が凝縮して描かれている。プレスシートによれば、『ヒトラー～最期の12日間～』（04年）の制作者でもあるベルント・アイヒンガーが本作を製作、脚本するについては、「私が“こま切り手法”と呼ぶ、構成要素をバラバラにする劇作法を用いることに決めた。」と語っている。また、本作を監督し共同脚本を書いたウリ・エデルは「ベルントにこの映画の監督をやらないかと言われた時、『他に誰がやる？我々世代の話だし、ずっと自分の心を占めてきたテーマだ』と思った。」と語り、原作者のシュテファン・アウストは「『ついに来たか！』と思った。彼が映画化するとやってくるのを20年間待っていたんだ。」と語っている。

正直言って、本作で描かれるたくさんの事実のうち私が知っている歴史的事実は①1972年9月5日に起きた「黒い9月」によるミュンヘン・オリンピックの選手村におけるイスラエル選手団11名と警官1名の銃撃事件、②1977年10月13日のルフトハンザ機ハイジャック事件くらいだから、本作ではじめて知ったRAFの活動は衝撃的。連合赤軍は「総括」という名の内部抗争で自壊し、目立った闘争は①1972年2月19日のあさま山荘事件、②1972年5月30日のテルアビブ空港乱射事件くらい（？）だが、ドイツにおけるRAFの闘争が段違いに激しかったことが本作を観ればよくわかる。

しかし、貧しく虐げられた人々に対する優しい視線や、国家権力の横暴に対する反発心が彼ら「革命闘士」の行動の原点だったとしても、RAFも連合赤軍もその行きつく先は凶気？ウリ・エデル、シュテファン・アウスト、ベルント・アイヒンガーのトリオが、本作から観客に考えさせたかったのはそんなこと？

## <日本だって！ドイツに負けないぞ！>

ドイツでウリ・エデル、シュテファン・アウスト、ベルント・アイヒンガーの3人がRAFの活動の足跡をたどる企画を実現させ、アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされたと自慢するのなら、日本だって負けてはいない。日本では高橋伴明監督の『光の雨』（01年）、原田真人監督の『突入せよ！あさま山荘事件』（02年）が連合赤軍のあさま山荘事件を題材としたが、『突入せよ！あさま山荘事件』を「権力側から描いた！」と強く反発したのが、若松孝二監督。

そんな彼が製作・監督したのが、3時間10分の大作『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程（みち）』（07年）だ。彼の製作意図は「きちんと歴史を描いて、そして僕はあの時代を検証したかった。」「映画は、時効がないから、僕が死んだ後も残るから、だからこそ、あの事実をきちんと残しておきたかった」ということだから、これはきっと、ウリ・エデル、シュテファン・アウスト、ベルント・アイヒンガーの3氏と同じ。今ドキなぜこんな映画が？今ドキ誰がこんな映画を観るの？というのが私の第一印象だったが、意外や意外この作品は大きな話題となり、第58回ベルリン国際映画祭最優秀アジア映画賞（NETPAC賞）など多数の賞を受賞した他、第82回キネマ旬報ベスト・テン日本映画第3位に選ばれるなど大奮闘。もちろん玄人筋が評価しているのだろうが、40年前のRAFを描いた映画がドイツで製作されたのなら、日本だって！ドイツに負けないぞ！

## <治安維持法時代とは大違い！>

戦前の日本には治安維持法という大変な悪法があった。これによって天皇制を否定し国体の変革を主張する共産主義者はもちろん、少しでも自由主義的な思想をもつ学者たちはすべて検挙されたわけだ。最近若者たちに大ヒットしている小説『蟹工船・党生活者』（1953年・新潮文庫）を書いたプロレタリア文学の最高峰小林多喜二はこの罪によって逮捕され獄死したが、これが拷問死であったことは歴史上まちがいない事実。

ちなみに、日本共産党の書記長、委員長を長年つとめた宮本顕治が獄中において宮本百合子との間で交わした 往復書簡を綴集『十二年の手紙・上下』（1983年・新日本文庫）は私が大学時代に読んだ本。そして、小林多喜二の生涯を描いた映画が『小林多喜二』（74年）だが、治安維持法時代の日本の獄中生活と、本作にみるバーダーやメインホフ、エンズリンたちの獄中生活を比べると、その違いの大きさにビックリ！

また、市川正一の『日本共産党闘争小史』（1964年・大月書店）は法廷闘争の中であれば、少しでも自分（被告人）の主張を公に発表することができることに目をつけて完成したものだ。本作にみる法廷闘争の様子をみると、被告人は言いたい放題、傍聴席からは被告人の発言にヤンヤンヤの拍手喝采など、その違いにビックリ。ちなみに、中国共産党は天安門事件20周年の機会に逮捕覚悟で台湾から北京に戻ろうとしたウアルカイシ氏をあえて入国させず、逮捕のチャンスを見すみずみ逃したがそれはなぜ？それは、ウアルカイシ氏の帰国は、裁判闘争の中で自分の主張を展開するためだと覚った中国共産党が、彼を逮捕、起訴するよりも無視した方がベターだと判断したため。本作にみるバーダーやメインホフらのド派手な法廷闘争の姿をみると、中国共産党のそんな対応について、「なるほど、すごい高等戦術」と感心しきり・・・。

## <裁判官も検察官も、そして・・・>

中核派VS核マル派など各セクト間の内ゲバもすごかったが、連合赤軍の活動が武装闘争化していったのは完全な論外。それと同じように、いやそれ以上にRAFの武装闘争化がすごかったことは、本作をみればよくわかる。私が本作ではじめて知りショックを受けたのは、ミュンヘン・オリンピックでの選手襲撃やルフトハンザ機ハイジャック事件以外に、現職の裁判官や検察官への襲撃事件が起きていること。そんな事態は日本では到底考えられないが、そんな銃撃事件が2度3度と起きれば、起訴する側や裁く側もビビるのは当然？

そんなRAF最後の大作は、実業家のハンス・マルティン・シュライヤー氏誘拐によるバーダーやエンズリンなどの釈放要求闘争だ。これらのRAFの武装闘争に対して、さてホルスト・ヘロルド（ブルーノ・ガンツ）をトップとする警察側はいかなる対応を？それをあなた自身の目にしっかりと焼きつけ、日本における1990年代の「失われた10年」とは何だったのかを総括すると同じように、ドイツにおける1967年から1977年までのRAFの10年間は一体何だったのかを、しっかりと総括してもらいたい。

2009（平成21）年6月20日記

## <追記>

私は毎週土曜日に大阪日日新聞で「弁護士坂和章平のLAW DE SHOW」を連載しているが、本作は予定されていた夏の公開日直前の土曜日に書かなくて、と決めていた作品。ところが公開予定日が夏から秋に変更された（延びた）ため、9月の掲載日に向けて予定を調べてみると、9月の予定にも入っていない。こりゃ一体ナニ？どうして？

そう思ってさらにネットを調べてみると、何と日本の独立系配給会社であるムービーアイ・エンタテインメントが倒産したため、本作の東京での公開がラストとなり、本作の大阪での公開は中止になる可能性が高いとのこと。せつかくの話題作なのに、実に残念！

2009（平成21）年8月11日記